

吉村昭記念文学館 News

万年筆の旅

vol. 20

創刊10年



巻頭コラム

海暮れきれば……

日下部雅生

今号の表紙

映えあう声

平松麻

- 令和4年度第1回企画展開催報告 「吉村昭「高熱隧道」—黒部の難工事を描く—」
- 友の会限定講座開催報告 「始まりは、ひと言の言葉より—ドラマ「海も暮れきる〜小豆島の放哉〜」—」
- おしどり文学館協定記念講演会開催報告 「おしどり夫婦 成功の秘密—吉村昭 津村節子—」
- おしどり文学館協定荒川区・福井県合同展示開催報告
 - ・トピック展示第19回 「吉村昭と津村節子—夫婦作家の庭、思い出の草花—」
 - ・トピック展示第20回 「吉村昭と津村節子—故郷と家族の記憶—」

◆小豆島幻想

背の高い藪の斜面をかき分け掘んでよじ登る。まだ初夏と呼べる時季なのに汗が流れ落ち蚊が纏わりつく。日暮れまでに何としても視界を確保したくてひたすら歩を進める。漸く尾根に出た。弁天島、べんてんじま中余島、なかつよしま大余島、おおよしまが右手に連なり左手に土庄の港が広がる。吉村昭の『海も暮れきる』、尾崎放哉終焉の景色が眼下に広がった。

文学の世界とは、いささか縁遠い私にとって吉村昭は旅である。彼の『熊嵐』に出会い、熊に興味をもち、北海道三毛別の六線沢に8人殺しの熊に消された廃村を探し、そこから北海道に並々ならぬ思いをもつて『熊撃ち』『熊』は勿論、間宮林蔵『万年筆の旅(作家のノートII)』と読み進め、その地に旅をした。沖縄県立芸術大学に勤めて紅型を研究していた6年間は、先の大戦にまつわる著書にも多くを教えられ、本島、離島に戦跡を巡った。



日下部家に伝わる尾崎放哉の写真 後列右端が放哉
 日下部氏の曾祖母福間初氏(前列右から3人目)は放哉の従姉。
 初氏と中谷義藏氏(初氏の左隣)の銀婚式で撮影※。放哉31歳頃。
 前列右端は放哉の妻豊。日下部氏は幼い頃、伯祖父中谷一雄氏
 (三菱銀行頭取・後列右から3人目)から様々な外国での旅話
 を聞き、自身も旅好きになったという。(写真提供 日下部雅生氏)

しかしながら、『海も暮れきる』で描かれる小豆島には手を出せずにいた。吉村が強い思い入れをもって取材し、書き上げた自由律の俳人尾崎放哉、終焉の8か月、その舞台である小豆島。吉村が取材に訪れた際、生前の放哉を知る人たちからは「何故あんな人間を小説にするのだ？」と言われた逸話は有名である。金の無心はする、酒癖は悪い、東大出を鼻にかける、といった迷惑な人物で、もし今彼が生きていたら「絶対つき合わないでしょうね」と、吉村自身も語っている。

週れば父方に繋がる、私のご先祖となる尾崎放哉。子供の頃「あんな人になつたらあかん。あんたには放哉さんの血がちよつとずつ流れているんやで」と、癪癪持ちで権威主義、すぐに手が出る父を、家族で遠巻きに囲む度、母は冗談とも本気ともつかぬ口調で囁いたものだ。今となつては「あんな人」が直接父を指していたのか、父に縁続く放哉を指してい



「今・今更に型紙にて放哉を想う—
日下部雅生作品展—」より(一部)※
放哉句を表現。町家の空間を活かした展示。



型絵耀変銀箔採色額『海も暮れきる』

たのかわからぬが、この幼少期の刷り込みは、かなり根深く、私から「放戩」を遠ざけることとなっていた。そんな私が今、小豆島土庄の土を踏んでいる……。

◆海暮れきれば……

◆今、今更に型紙にて放哉を想う
私は型紙を彫り、それを基に作品
り上げる。純粹な型絵染から型絵
銀箔彩色技法^{ぎんぱくしじき}（型紙で銀箔を貼
た画面を腐食させ絵柄を浮かび上

るオリジナルテクニク）で作品を描いている。2022年晩秋、京都の古い町家「堺町画廊」で行われた個展「今・今更に型紙にて放哉を想う―日下部雅生作品展―」にて、私は現時点での放哉に対する自分なりの想いを作品として展示した。

放哉は世捨て人ではない。結核はもとより、様々な不安と不満に苛まれながらも、より納得できる句を作り出し、世に認めさせたいという強い思いと焦りがあつた。死を前に詠まれた句は、吉村が若い身を病床に横たえていた時の思いと重なり、満を持して小説「海も暮れきる」を書くまでの長い葛藤へと繋がっていく。

あんなに避けていた放哉に、今、私自身が少なからず同じものを追いかけていることを感じる。表現者としてのの先輩である放哉に叱咤され、かつて吉村が、羞じるまでに至らなさを感じた孤高の狂気には追い付く術もないが、その片鱗にさえ恐れ慄きながら。

日下部雅生プロフィール

1964年京都市生まれ。京都市立芸術大学教授。専門は型染・染色造形。京都市芸美術作家協会理事。日展会友、京都万華鏡ミュージアム運営同人。日展特選。全関西美術展賞、国民文化祭実行委員会会長賞ほか多数受賞。東日本大震災被災地における「手遊びカフェ」の開催など、国内外で工芸を軸とした多岐にわたるワークシヨップや研究活動を行なっている。

※(作品展写真上段左から)「障子あけて置く海も暮れ切る」「咳をしても一人」「入れものが無い両手で受ける」「一人の道が暮れて来た」「とはに隔つ棹の釘を打ち終へたり」「こんなよい月を一人で見て置く」

始まりは、ひと言の言葉より

「ドラマ」海も暮れきる〜小豆島の放哉〜

講師…松岡みどり氏(俳優、俳人)

日時…令和4年8月28日(日)14時〜16時

吉村昭は『海も暮れきる』昭和55年講談社で、自由律の俳人尾崎放哉が、放浪の末に辿り着いた小豆島を舞台に、放哉最後の8か月を描きました。放哉と同じ肺結核を患った自身の闘病体験を掘り下げ、その生と死を描き出しています。

この作品は、昭和57年(1982)にラジオドラマ化された後、『海も暮れきる』小豆島の放哉』としてドラマ化されました(昭和60年NHK松山放送局、同61年NHK総合)※。小豆島でオールロケが行われ、放哉役の主演、橋爪功以外は、全て小豆島の住民が演じています。ドラマを見た吉村は、原作が浮き彫りにされていると賛辞を贈り、感謝を表しました。

講師の松岡みどり氏は、ドラマに感

銘を受け、多くの人に見てほしいとの一心で、平成4年(1992)、自ら企画した再上映会を実現しました。会場はNHK博物館には、500人以上が来場し、ドラマ関係者による同窓会も盛大に開催され、吉村と津村節子も出席しました【写真1】。

講座では、再上映をきっかけに、吉村と交わした手紙の数々など、貴重な資料をスライドで解説いただきました。また、吉村との食事会での思い出や、小豆島の方々との親交、ドラマの魅力をお話しいただきました。さらに、放哉句稿15点(写真提供 小豆島尾崎放哉記念館)を鑑賞した上で、ドラマの映像資料(提供 松岡みどり氏)を視聴し、放哉の世界をたどりました。

最初に、松岡氏は、昭和59年、友人の



松岡みどり氏

吉村が、放哉はどんな境遇でも「豊かさは持っていた。だから作品が生まれた」と語ったインタビュー記事(注)も朗読いただきました。



*松岡みどり氏所蔵資料



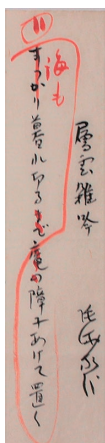
【上・写真1】再上映後に開催された同窓会で*平成4年9月19日 前列左からドラマを演出した橋高幸三、吉村、松岡氏。後列右が津村節子。

【下・写真2】吉村邸近くで*平成5年10月20日 句牌揮毫依頼のため、吉村(右端)を訪ねた森克允氏(左端)と同行の松岡氏(吉村の左)。森氏の右は津村。その隣は土庄町の喫茶店「どんぐり」店主(当時)の松本廣子氏。森氏によると小説『海も暮れきる』を基に、土庄町で記念館建設が計画されたという。



【写真3】(右)尾崎放哉句稿「障子あけて置く海も暮れ切る」(写真提供 小豆島尾崎放哉記念館)朱の手入れは萩原井泉水による。放哉原句は「すっかり暮れ切るまで俺の障子あけて置く」。

(左)吉村揮毫の放哉句碑 小豆島尾崎放哉記念館前に建立

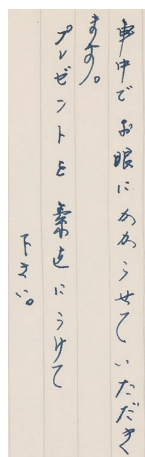


平山武之氏(当時NHKチーフディレクター)から「小豆島で死んだ自由律の俳人は誰か」と質問されたことが、放哉を知る「始まり」となったこと、また、俳人池内恵吾氏に教わった吉村の「海も暮れきる」を読み、放哉の句「咳をしても一人」から、深い孤独を感じたことを振り返りました。その半年後には、新聞で偶然ドラマ放送を知り、視聴したそうです。

松岡氏は、放哉を看取るシゲを演じた大村明美氏をはじめ、「役として自然に生きている」小豆島の方々の存在感や、方言と即興を交えた演技に衝撃を受けたとした上で、「スタッフとキャストが一丸となって取り組んでいる」と画面越しに伝わってくるのが、ドラマの最大の魅力であると解説されました。

また、平成6年4月7日、放哉安住の地、香川県小豆郡土庄町で開催された「小豆島尾崎放哉記念館 開館記念式」へ、吉村から招待された思い出をお話しになりました。放哉句碑「障子あけて置く海も暮れ切る」の揮毫を吉村に依頼するため、森克允氏(当時土庄町商工

観光課長)に同行した際、「小豆島にまだ行ったことがない」と話したことを覚えていた吉村の心遣いだったと明かされました【写真2・3】。吉村から「プレゼントを素直にうけて下さい」【写真4】と添えられた新幹線グリーン車の切符が届き「胸がいつばいで涙がこぼれた」と、松岡氏は吉村を偲びました。



▲【写真4】吉村が松岡氏へ贈った新幹線切符に添えた手紙*

橋爪功氏のビデオレターを 上映しました



橋爪功氏(俳優) 「なんだか尾崎放哉っていう人が私の中では住んでいるような気がしました……しています今も」と語る橋爪氏



ドラマの一場面 放哉役の橋爪功氏と(右)シゲ役の大村明美氏 放哉が、網を干シてと妻と会話する場面。(写真提供 小豆島尾崎放哉記念館)

*このドラマは、公益財団法人放送番組センター放送ライブラリー(横浜市中区)で視聴できます。詳しくは直接お問い合わせください。

吉村昭「高熱隧道」——黒部の難工事を描く——

会期：令和4年10月21日(金)

12月21日(水)

吉村昭は、昭和42年(1967)、富山県にある黒部川第三発電所・仙人谷ダムの歴史に残る難工事を描いた長篇小説「高熱隧道」を発表しました。昭和32年ころ、「水の葬列」を執筆するため、建設中の黒部川第四発電所・黒部ダムの工事現場を訪れた吉村は、第三発電所建設時に作られた熱気に包まれたトンネルに強い印象をいただきました。

この度の展示では、55年前に発表された「高熱隧道」に焦点を当て、取材・



企画展示室入口

入口にはトンネルをイメージしたアーチを設置しました。

調査内容を記した自筆ノートをはじめ、執筆時の文献資料、建設中の黒部川第四発電所を訪れた際の写真などを紹介しました。また黒部電源開発の歴史を追い、木本正次の小説「黒部の太陽」関連資料や、三船敏郎・石原裕次郎主演の映画「黒部の太陽」関連資料も展示しました。

「第1章 太宰治賞受賞まで」では、「高熱隧道」執筆までの吉村の活躍について取り上げました。作品を掲載した同人誌・商業誌をはじめ、吉村・津村節子の芥川賞・直木賞候補の通知や太宰治賞の賞状、戦艦武蔵の取材ノートなどを紹介しました。

また「高熱隧道」執筆へと繋がった「水の葬列」の自筆原稿も展示しました。この作品はダムの湖底に沈む村を舞台に描いた虚構小説で、建設中の黒部川第四発電所・黒部ダム建設工事をはじめ色々なダムへ調査に訪れ書いた作品です。「墳墓の谷」として発表し、高見順より高い評価を受けたものを「水の墓標」として太宰治賞に応募し、その後改めて発表する際に「水の葬列」としました。

「第2章 高熱隧道を描く」では、「高

熱隧道」執筆時の資料や作品世界について触れました。万年筆や自筆原稿、取材ノートに加え、執筆後に高熱隧道を訪れた吉村・津村夫妻についても当時の写真や吉村の日記を通して紹介しました。また黒部川第三発電所・仙人谷ダム工事に関連する貴重な書籍や写真、映像資料を展示しました。映像は黒部峡谷鉄道樺平駅構内で放映している「黒部奥山を拓く」(11分、製作著作関西電力(株))で、工事に挑む当時の様子や、黒部川開発の歴史についてもご覧いただきました。

「第3章 黒部川の電源開発」では、明治末ころから注目されていた黒部川の水力発電について紹介しました。黒部ダムについて取り上げる中で、難工事を描いた小説・映画「黒部の太陽」の関連資料を展示しました。展示ケースでは、単行本をはじめ、パンフレット

やポスター、映画で着用された衣装などを紹介し、その横には180枚の愛知県豊川市で行われた映画ロケ写真を掲示しました。

「第4章 難工事を描く」では、トンネルの難工事を描いた作品として昭和61年に発表した「闇を裂く道」について紹介しました。舞台となったのは熱海・三島間を結ぶ東海道線の丹那トンネルで、自筆原稿やトンネルについて記したメモに加え、執筆時の参考資料などを紹介しました。

お客様からは、小説の作品世界について「より実感が湧いた」というお声や、高熱隧道、黒部ダム、富山県などの舞台地に、興味を持ったというお声をたくさんいただきました。令和5年、黒部ダムは竣工60周年、宇奈月温泉は開湯100周年を迎えます。是非現地を訪れてみてはいかがでしょうか。(学芸員 北山ゆかり)

企画展図録のご案内

- 販売場所：ゆいの森あらかわ1階総合カウンター 郵送販売も承ります。詳細はHPまたはお問い合わせください。
- 価格：350円(税込)
- 規格：B5、48ページ、オールカラー
- 内容：企画展で紹介した取材ノートや関連資料を掲載しています。最相葉月氏、谷甲州氏、宮島咲氏にご寄稿いただきました。



展示室の様子を公開!!

バーチャル展示室

関連イベント

●講演会

「黒部ダムとダムの魅力」

講師：宮島咲氏

日時：12月3日(土) 14時～15時半

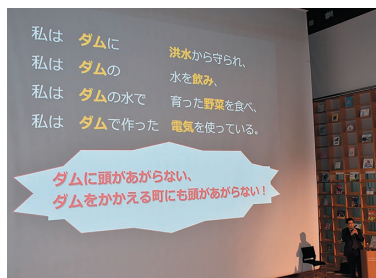
ダムマニア&ダムライターの宮島咲氏による講演会をゆいの森ホールで実施しました。



宮島咲氏

企画展で黒部川にあるダムを取り上げたことから、宮島氏に黒部ダムをはじめ、ダムの働きや楽しみ方についてお話しいただきました。講演では様々な特徴を持つ日本全国のダムを、スライドや映像を用いて解説してくださいました。

お客様からは、「ダムに人格があるように思えるお話でした」といったお声の他にも、「生活にダムが密着していることがわかった」など、ダムや水、資源について考察する機会になったというお声が寄せられました。



講演会の様子

ダムの役割や観光場所としての魅力などをたくさんの写真を紹介しながら説明してくださいました。講演の後半には、映像によるダムの放流の紹介もありました。

●ダムカード展

「関東地方のダムカード大集合!!」

会期：10月21日(金)～12月28日(水)

関東7つの都・県で配布されているダムカードを会期中ゆいの森あらかわ1階エントランスで展示しました。

一緒に展示したダムカラーカードの前でもたくさんの方が足を止めてくださっていました。



一面に並んだ関東地方のダムカード

イラストが描かれたもの、キラキラ光るものなどカードの仕様にも、注目が集まりました。

展示に際し、格別のご協力を賜りました関係機関に深く感謝申し上げます。

(団体名別 敬称略)

関東地方整備局 相模川水系広域ダム管理事務所
群馬県 栃木県 東京電力リニューアブルパワー

●上映会

「黒部の太陽」

日時：10月30日(日) 13時30分～17時

三船敏郎・石原裕次郎主演の映画「黒部の太陽」(映像提供：石原音楽出版社)をゆいの森ホールで上映しました。会場は満席でしたが、大画面に映される迫力のシーンに、一時静まり返る場面もありました。

3時間16分という長時間にも関わらず最後までたくさんの方がご覧くださ

いました。上映会後は展示室で、映画関連の資料をご覧くださる方がたくさんいらっしゃいました。



満員のホール

●クイズラリー

「ひらめき探検! ゆいの森あらかわ」

会期：10月21日(金)～11月28日(月)

※限定150部配布により終了

ゆいの森あらかわ1階から3階を巡りながらクイズを解くクイズラリーを実施しました。様々な年代の方にご参加いただきました。クイズを解き終わった方にはオリジナルグッズとして、「高熱隧道」の舞台地である仙人谷ダムのダムカード風メモ帳をプレゼントしました。



ダムカード風メモ帳

ダムカードをイメージしたメモ帳。メモ帳の中面には眼鏡のイラストをプリントしました。

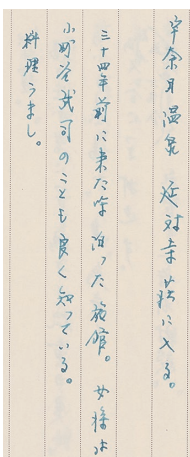
学芸員ノート7

吉村が平成3年に宇奈月温泉を再訪した際に宿泊した旅館「延対寺荘」は、昭和32年ころ、初めて来た時にも泊まった宿です。今回の展示では、昭和32年ころの「延対寺荘」のパンフレットを黒部市歴史民俗資料館から借用しました。



右) 吉村昭平成3年7月28日の日記より*
左) 延対寺荘で浴衣を着た吉村**

* 津村節子氏寄託資料。



** 津村節子氏蔵。

訃報 加賀乙彦氏

ゆいの森あらかわ名誉館長の津村節子氏と長きにわたり親交があり、共著『愛する伴侶を失って 加賀乙彦と津村節子の対話』(平成25年 集英社)も出版された加賀乙彦氏が、令和5年1月12日にご逝去されました。加賀氏には平成30年に開催した企画展「津村節子展」生きていること、書くこと」の図録にご寄稿を賜り、吉村氏との出会いや津村氏との共著の思い出など、貴重なお話を寄せいただきました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

吉村昭氏(荒川区出身)と津村節子氏(福井県出身)は、文壇のおしどり夫婦と呼ばれています。お二人にちなみ、当館と福井県ふるさと文学館は、平成29年(2017)に「おしどり文学館協定」を締結し、文学館同士の連携事業を行っています。5年目を迎え、両館で2回の特集展示と、講演会を実施しました。

(展示資料の*は津村節子氏寄託資料)

第19回トピック展示 吉村昭と津村節子 夫婦作家の庭、思い出の草花

会期：令和4年9月16日(金)～12月14日(水)

津村節子「紅色のあじさい 津村節子自選作品集」(令和4年 鳥影社)を中心に、吉村邸の庭と書斎、草花の写真や、草花が描かれた作品を紹介しました。

津村は、度々、小説や随筆で、庭にまつわる夫婦の思い出を記しました。表題作「紅色のあじさい」では、庭で花を愛でる津村を、書斎の窓から見た吉村が「花の好きな女だなあ」と言ったそ

の面影が描かれています。

昭和44年(1969)、井の頭公園に隣接する土地に転居した際、津村は、一年中、花が咲く庭にしたいと考え、吉村と共に植物を選びました。中でも、吉村は紅梅を最も好みました。鶯が紅梅に飛来すると、書斎から、母屋にいる津村へ電話で知らせ、二人で庭に出て、鶯のさえずりを聴くこともありまし

た。他にも書斎の植え込みには、津村が好んだあじさいや、しだれ桜、しゃくなげ、つつじ、さざんか、つばきなどが植えられ、季節が巡る度に花を咲かせました。吉村は、平成18年7月31日に永眠するまで、この草花が見える書斎で執筆を続けました。

今回は、津村が、庭の紅梅をタイトルとし、吉村の闘病と最期の日々を記した長篇「紅梅」校正稿と清書稿や、随筆「花の庭」の自筆原稿(以上津村節子氏蔵)、吉村昭自筆原稿「月下美人」*などをご覧いただきました。また、吉村が鶯のさえずりを録音したカセットテープ「鶯の谷渡り 昭和59年春 我が家の庭にて」*を送し、夫婦作家が過ごした憩いのひとときを感じていただきました。

来場のお客様からは「津村さんとの関係や、吉村さんの執筆環境が理解できて良かった」、私的な写真を通して「部屋に招かれたように明るい気持ちになった」、また、「互いに表立って見える影響ではない

かもしれない」が、「作家単独で作品ができていたのではないことに、はっと気づいた」などの感想が寄せられました。

第20回トピック展示 吉村昭と津村節子 故郷と家族の記憶

会期：令和4年12月16日(金)～令和5年3月15日(水)

吉村と津村は、共に早くに両親を亡くしました。この体験は、それぞれの故郷である荒川区、福井県の情景と共に、随筆や小説に描かれました。

今回は、吉村が父の死と葬儀を描いた短篇「欠けた月」「冬の道」「月下美人」昭和58年 講談社)や、津村の随筆「母」「遺言」(『風花の街から』昭和55年 毎日新聞社)を中心に取り上げました。

また、津村が父の死を回想した短篇「雪の柩」(『遊園地』昭和55年 中央公論社)の自筆原稿(写真提供 福井県ふるさと



津村の母北原とよ
昭和12年、とよは、津村が9歳の時に病死した。体が弱かった幼い頃、夜通し看病してくれた母の温もりは、随筆「母」に記された。(津村節子氏蔵)



(右から)津村の父北原芳司、姉、津村、妹
福井県内で
子煩悩で、カメラ好きだった芳司。とよ没後、津村の健康や、娘たちの進路を考えた芳司の判断で三姉妹は東京へ転居。織物業を営んでいた父は、仕事のため勝山町で暮らし、津村が15歳の時に急死した。(津村節子氏蔵)

と文学館)を紹介しました。仕事のため、織物業の好景気にわく勝山町で暮らし、心臓麻痺で一人、急死した父の死を悔やみ、胸を痛めながらも、その晩年に心安らぐ時間があつたことを祈る娘の心情が描かれています。展示室では、津村の父北原芳司が撮影した「昭和初期の福井」(映像提供 福井県ふるさと文学館)も放映しました。家族と過ごす朗らかな幼少期の津村が収められています。

さらに、吉村の短篇「冬の道」草稿と清書や、津村氏所蔵アルバムより、家族皆で過ごした幼少の頃や、学習院大学文芸部での出会いから、結婚までの二人の写真を関連作品と共に展示しました。

一方、新人時代の吉村と津村を評価した福井県三国町(現坂井市)出身の作家高見順との関わりも取り上げました。高見が選考委員を務めた津村の短篇「さい果て」(第11回新潮社同人雑誌賞受賞)の自筆原稿(津村節子氏蔵)と、吉村の短篇「石の微笑」(第47回芥川賞候補)の自筆原稿*を中心に紹介し、夫婦作家の歩みをたどりました。(学芸員 深見美希)

福井県ふるさと文学館特集展示

福井県ふるさと文学館では「津村節子と吉村昭」おしどり文学館協定の歩み(令和4年10月28日～12月21日)で、両館の活動が紹介されました。

続いて、津村節子の芸術選奨文部大臣賞受賞作『智恵子飛ぶ』(平成9年 講談社)を取り上げた津村節子「智恵子飛ぶ」芸術家夫婦を描いて「令和4年12月23日～同5年3月15日」が開催されました。芸術家夫婦である高村光太郎と、妻智恵子の葛藤や苦悩を描いた長篇小説です。執筆時の取材資料や、小説に描かれた荒川区が紹介されました。

おしどり夫婦 成功の秘密

— 吉村昭 津村節子

講師…谷口桂子氏(作家、俳人)

日時…令和4年11月20日(日) 14時～15時半

谷口桂子氏は、令和3年に『食と酒吉村昭の流儀』(小学館文庫)、翌年『吉村昭の人生作法 仕事の流儀から最期の選択まで』(中公新書ラクレ)を刊行しています。著名夫婦350組をインタビューした経験から、吉村昭、津村節子こそが最も「おしどり夫婦」だと感じる理由と、二人の「成功の秘密」を、ご子息吉村司氏のお話を交え、講演いただきました。また、週刊誌や地方新聞に掲載された夫妻のインタビューや随筆など、貴重な資料をスライドで解説いただきました。最後には、事前に行われた津村へのインタビューも紹介いただきました。

最初に、谷口氏は、吉村、津村との「ご縁」が続いたきっかけとして、丹羽文雄の存在にふれました。丹羽は、夫妻にとって文学の師であり、谷口氏自身も影響を受けた作家でした。津村との親交は、丹羽と同じ三重県四日市市の出身である谷口氏が、市に提案した「丹羽文雄文学賞」の賛同人を依頼したことが始まりでした。また、丹羽が推薦文を書いた津村の『銀座・老舗の女』(昭和60年 文春文庫)で俳人鈴木真砂女を知り、後に自身の俳句の師となったことを紹介されました。

続いて、「おしどり夫婦勝手にランキン」があるとするれば、吉村と津村が1位だと感じる六つの理由を、二人の著作や発言を引用し、詳細に分析されました。

まず、第一に、作家として「両雄並び立っている」こと、第二に、「創作という非日常と日常の生活を見事に両立」し、日々の生活を大切にすることを挙げました。とりわけ「家族の食卓」を大切に、徹夜が続く執筆の中でも、津村は必ず、子どもたちのお弁当を作ったこと、吉村が年中行事を重んじたことなどを紹介されました。第三に、新婚の頃、夫婦で東北から北海道の根室まで、行商の旅に出た「苦労」を取り上げ、津村の「私、よくついて行きましたよ」という言葉にふれながら、共に作家として大成し、約50年後には、夫婦で日本芸術院会員となった歩みを「奇跡のような歳月」と表現されました。第四に、「激しい夫婦喧嘩」を挙げました。谷口氏は、「完全無欠の人格者」だと思っていた吉村に「痼性で怒りっぽい」一面があったことを知った時、「人間吉村昭の体温に

触れた気がした」と語り、その上で、若い頃に「ごまかさずにぶつかり」あったからこそ「真のおしどり夫婦」になれたのではないかと分析されました。第五は、「お子さん」を挙げるとして、吉村司氏の「オープンマインド」で「細やかな気遣いを忘れない」人柄を育んだ夫妻の教育に言及されました。司氏による親心が感じられるエピソードを交え、「大変子煩悩で教育熱心」な父親であったと紹介されました。最後に、夫婦仲が良く「吉村家にはいつも人が集まった」ことを挙げました。

さらに、司氏のお話に基づき、吉村が抱いた「深い家族愛」に言及されました。「君を中心に思いもかけないあたたい素晴らしい家庭を得て、僕は、幸せです」と記した津村への手紙にふれ、吉村にとって、最愛の妻と、二人の子がいる家庭は「決して失いたくない」ものであったとお話しになりました。また、「一家の主としての意識がとて強い」吉村が、「戦艦武蔵」執筆の頃、津村の姉に宛て「一年間、小説に専念して家族を養えるだけの収入が得られなければ、筆を折る覚悟です」と記したことを紹介し、「自分の命そのもの」である小説への志よりも、家族を守ることを一番に考えた愛情こそが、「ベストワンカップル」最大の理由だと結ばれました。

これらの理由を踏まえ、夫婦の「成功の秘密」としては、第一に、困難な時期を共に「上手く乗り越え、好機を逃さなかった」こと、第二に、「互いの作品は読まない」という「ルール」を作り、「距離の取り方がうまくいった」ことを挙げました。第三に、家計が苦しい中、吉村が「早い時期からお手伝いさんを雇い」、津村が書き続けられる環境を作ったこと、第四に、「育った環境が似ていた」こと、また、身内を含め「周囲の人間関係が良かった」ことに言及されました。さらに、互いへの「スラングになった時の思いやり」という津村の言葉を挙げました。

谷口氏は、伴侶とは「欠損しているところを共有する存在」であるとした上で、二人の「置き換えの効かない相性」を「愛妻のために命そのものの小説を捨てようとした夫と、すべてを受け入れた妻の組み合わせの妙です」と表現されました。最後には、「生まれ変わってもまた一緒にいたいのですか」という質問に、津村が「もちろん、もちろんですよ」と即答したことを紹介されました。



谷口桂子氏



恩賜賞・日本芸術院授賞式で 平成15年6月2日

講演会に参加の皆さまへ、福井県ふるさと文学館からは、不織布バッグを、当館は、活版印刷で製作したフアイアルフォルダーと、越前和紙の葉をアレンジしたフオルダーには、吉村邸庭の紅色のあじさいと書斎を描きました。今後も、両館の活動にご期待ください。

講演会に参加の皆さまへ、福井県ふるさと文学館からは、不織布バッグを、当館は、活版印刷で製作したフアイアルフォルダーと、越前和紙の葉をアレンジしたフオルダーには、吉村邸庭の紅色のあじさいと書斎を描きました。今後も、両館の活動にご期待ください。



映えあう声

平松麻

青年期、わたしの中には何らかの「独白」が常に反響していた。それが自身の語りなのか、はたまた他人の語りなのかは、分からなかった。誰かの「独白」が聞こえすぎる心体はゆっくり侵蝕されはじめていて、若いわたしは灰色がかった日々を生きていた。

そのさなか、27歳で『星への旅』に出会った。「吉村昭」という名すら知らなかったその日から今日までの13年間、この1冊がいつもそばにある。

書店の文庫棚から『星への旅』を引き抜いた瞬間のことは、どうしたって忘れることができない。体内に響いていた誰かのあの声が外へ飛び出し、水を得た魚のように本の中に滑り込んでいくのを見たのだ。小説の中で生きて死んでいく熱っぽい若者たちの元へ向かって。わたしも、彼らとなら気脈を通じあわせられる予兆を感じていた。

ことに「少女架刑」には救われた。16歳で死んだ少女が、新しく死を生き始めたからだ。少女の独白は、解剖されても、ホルマリン漬けにされても、納骨されてからも続いた。体をなくしてもなお「独白」で生きるというこの矛盾が、吉村昭の瑞々しい筆致によって矛盾ではなくなってゆく。この姿なき声の類をわたしは随分前から体内で知っていたと、目に見えない存在を現実として認めることができた。安堵した。

緻密な取材で事実と対峙することに全身全霊を捧げた吉村昭は、長篇小説では自身の声を静かにした。一方で、自由な創作の声を短篇小説の中で生きる若者に託した。

事実と創作を乗せたシーソーは永遠に水平になることがない。だから、作家は、生き、書き、描く。



平松麻氏が装画を描いた
谷口桂子『食と酒 吉村昭の流儀』
(令和3年 小学館文庫)

本書で感じた吉村昭の「優しさ」をマッチ箱に描いた「手」で表現した。*谷口桂子氏講演内容を7ページに掲載しています。



吉村昭『星への旅』
(昭和49年 新潮文庫)

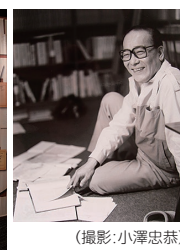
平松氏が絵を製作する際、必ず傍に置いている短篇集『星への旅』。「少女架刑」収録。他にアトリエには『巖』もある。

平松麻氏 創刊10年の表紙絵を描いていただきました

吉村昭の写真(右)を待ち受け画面にしていた時期もあったそうです。「厳しさを知っている方の笑顔に励まされた」と語る平松氏。



令和5年1月29日



(撮影:小澤忠恭)

平松麻プロフィール

1982年、東京生まれ。画家。油彩画をメインに展覧会での作品発表を軸に活動する。自身の体内に実在する景色を絵画にし、「雲」をモチーフに据えた心象風景を描く。新聞・雑誌・書籍の表紙画や挿画、執筆も手掛ける。2022年挿画集「TRAVELOGUE G」(スイッチ・パブリッシング)刊行。



編集後記 \\ 創刊10周年 //

平成25年3月から年2回で発行してきた「万年筆の旅」が、今年で10周年を迎えました。これまで本誌に関わっていただいたすべての皆様に心から感謝申し上げます。そしてこれからも多くの方々に吉村作品の魅力をお届けできるよう充実した誌面作りを目指してまいります。今後とも何卒よろしく願いいたします。過去の「万年筆の旅」は常設展示室3階で配布している他、文学館HPの「刊行物」ページからもダウンロードいただけます。

会員数500人突破!!

ありがとうございます!

「吉村昭記念文学館友の会 会員募集」

友の会会員を募集しています。限定グッズや各企画展の図録、各種イベントのご案内をお送りいたします。是非、ご入会ください!



毎年好評!
卓上カレンダーが
もらえます♪

【会員区分】	
個人会員(1年)	1,000円
個人会員(3年)	2,500円
法人会員	3,000円
賛助会員	1口2,000円から

詳しくはHPをチェック!



※イベント等の最新スケジュールは当館ホームページからご確認ください。

吉村昭記念文学館ニュース

万年筆の旅 vol.20

令和5年3月24日発行

■ 編集・発行/荒川区 登録番号(04) 0099号

■ 問合せ/吉村昭記念文学館

〒116-0002 東京都荒川区荒川2-50-1 ゆいの森あらかわ内

TEL : 03-3891-4349

FAX : 03-3802-4350

URL : <https://www.yoshimurabungakukan.city.arakawa.tokyo.jp/>

【開館時間】9時~20時30分 【入館料】無料

【休館日】毎月第3木曜日・特別整理期間・保守点検日・年末年始他

アクセス

- ・都電荒川線「荒川二丁目(ゆいの森あらかわ前)」下車 徒歩1分
- ・東京メトロ千代田線「町屋駅」2番出口、京成線「町屋駅」下車 徒歩8分
- ・コミュニティバス「さくら」ゆいの森あらかわ下車(土曜、日曜、祝日のみ)
- ・東京駅から(地下連絡通路経由)東京メトロ千代田線「大手町駅」→「町屋駅」(乗車13分)